

夢追い人

「ありがとう」の心を

大切にしたいものづくり

今月の夢追い人は、アルファタカバの小早川さんにお話を伺いました。

「感謝」を忘れない

アルファタカバは、昭和58年創業。当時の屋号はアルファソノダでした。それからアルファタカバという現在の社名に変更されたのが平成8年とのこと。
現在は23名の社員が在籍しているアルファタカバ。自社工場での生産だけでは得手不得手があるため、協力工場で



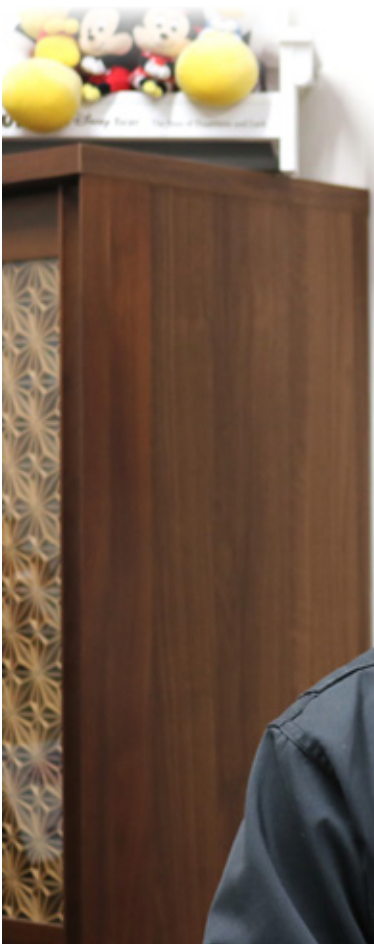
会社の外観

株式会社 アルファタカバ

代表取締役 小早川 恒緒 さん

の生産も行われていますが、その中でもこだわり続けていることがあるそうです。「とにかく国産に拘っています。価格や品質などを比べたとき、海外じゃないとだめかなと思いついた時期もありますが、いまは出来る限りは自社工場、もしくは国内の協力工場での生産に努めています。」
昨年9月、正式に代表取締役に就任され、半年目に入られた小早川さん。

「新しい理念が『ありがとう』を作る。ありがとうで作る。なぜそういうふうにしたのか」というふうで決めたのかというと、先代がずっと大切に守り続けてこられたのが『感謝』という言葉でした。感謝がないとすべてが上手くいかないよというのは、入社したときからずっと言われ続けてきたことです。それをもっとキャッチーな言葉にできないかなと考えて出来た言葉ですね。ありがとうを作るというのには、ありがとうの場所を作る、ありがとうの相手を作る。自分ひとりではなく、みんなで作っていかなくてはならないですね。」





収育シェルフ

「収育®」は(一社)日本収納検定協会の登録商標です。

それからありがとうで作るといふのは、ありがとうの気持ちでものを作って、ありがとうの気持ちで買ってくださるお客様と接するというものです」

意味のあるものづくり

現在、九州産業大学(以下、九産大)と一緒にプロジェクトを進められているアルファタカバ。スタートは福岡・大川家具工業会のプロジェクトの一つだった『産学連携プロジェクト』だったそうです。「スタートからではありませんが、途中から参加させていただいたプロジェクトでした。幸いにも、そのプロジェクトに参加してくれた学生がデザイナーとして入社してくれました。学校側からするとそういう部分も狙いだったかもしませんが、我々としてもすごく助かっていますね」

より九産大とのパイプが太く強くなったことで、新たに立ち上げられたプロジェクトがあります。

「主婦層に高い支持を受ける男性ライフスタイル系トレンドのバイオニアでもある『収納王子コジマジック』こと小島弘章さんが代表理事を務める(一社)日本収納検定協会が、『収育』という言葉で提唱し、活動されています。以前、建材の展示会へ出させていた言葉だなぁとずっと引つつかかっていました。青木幹太教授にも収育で新しいプロジェクトを立ち上げたいと相談したところ、ぜひやりましょうとお手伝いいただけることになりました。その後、収育について調べたところ、先ほどの(一社)日本収納検定協会に辿り着きました。代表理事である小島さんと一緒に商品開発してもらえませんかとお伝えしたら、ぜひやりましょうと言っていました。プロジェクトが本格的にスタートしました」

プロジェクトを進めていくなかで、整理収納のプロである小島さんだからこの視点でアイデアを頂くことも。「小学校や幼稚園などへ行つた際、子どもたちは必ずかばんを片づけますが、それはなんでだと思いませんか?というところから説明していただきました。それは片づける場所があるからというのが答えて、家のなかで母さんが片づけなさいと言ったときに片づけられないのは、片づける場所がないからなんです。片づける場所

場所はないけど怒られたくないから、子どもたちは押し込んで隠してしまう。でもそれじゃあダメですよ。じゃあ片づけられる環境、場所。そういうものを作れる家具をご提供させて頂ければいいんじゃないかと考えました」

ただ環境を作っても売れる側がきちんと説明できなくては意味がないとお話された小早川さん。「やるからには本気でやらなくては行けませんよ。ずつと動いていくなかで、なぜこの高さなのか、どうしてこの奥行きがいいのか、それを説明できないとなんの説得力もありませんから、さつそく収納検定に挑み、基礎知識が学べる3級、そして応用知識が学べる2級も取得しました。また九産大には4才児の男の子の平均的な身長や手の長さはこれくらいといった統計調査の本もありました。数値的な情報もいただき、様々なアイデアを頂戴しながら、より良い商品開発に取組んでいます」

「4月の展示会で発表できるかなと思っているのが、アクテイブシニアに向けた家具です。弊社の専務が、最近ちよつとタンスが使いにくいとぼろつとおっしゃられたのがきっかけです。どういうところが?と伺ったら『下のところがちよつと面倒なのよね』と。例えば介護用の家具は世の中にあくさんあります。アクテイブなシニアの皆様向

けではありません。元氣だけどちよつと使いにくい、若い頃は出来たけど今は出来ないみたいなことがあります。私自身はまだその年代ではないので、実際にはわからないこともたくさんあります。そこで九産大が所持している年齢別の統計データや青木教授にお手伝い頂いたり、ご近所のアクティブなシニアの皆様の生のお声を伺ったりしました。実際にやりたくいこと、できなくなったことのお話を伺い、そこを解決できるような使いやすい家具をご提供させていただければ良いんじゃないかなと思います。いま取組んでいます」

産地・大川を守り続ける

アルファタカバが手がけられているデイズニー家具。ウォルト・デイズニー・ジャパンとお付き合いをさせて頂くようになってからちよつと丸10年になるとのことでした。「どの業界でも同じだと思いますが、有り難いことに横にご縁をいただき、様々なキャラクター会社様やライセンサ会社様とお付き合いさせていただいています。そのなかでちよつと難しい課題を頂いて『産地大川だからどうにかできたんだよね』というふうに思ってもらえるようにしたい。こうと頑張っています」

デイズニーとお付き合いが始まったきっかけも大川イコール家具産地という認識が広まっていたからとのこと。「当時のデイズニーの担当者さんが『家具といえば大川で

しよう』ということで連絡を頂いたのが、お付き合いが始まったきっかけです。もしその方が、家具といえば旭川、家具なら飛騨だよねと思われていたのなら、いまあるご縁はすべてなかったと思います。そう考えると、やはり家具の産地である大川というブランドをしっかり守っていかなければいけないと改めて思っていますね」

会社のことだけでなく、家具産地としての大川を守り続けたいとお話された小早川さん。そんな小早川さんの夢はなんでしょうか。

「家具を使って頂く皆様に感謝して頂けるものづくりができる会社にしていきたいですね。そのベースには、社員一人ひとりが隣の人に感謝できる会社になりたいと思っています。ご家族であつたり、隣で働いている同僚であつたり。その人たちにありがとうと言える、そういう場でものを作れる会社になりたいです。それが37年間続けてこられた先代たちのお気持ちだとも思っています。私も大事にするべきことだと思っていますし、それが人として真つ当に生きていくには大切なことでもあります。ですから、ありがとうと言える会社作り、ありがとうの気持ちで物が作れる会社づくりをいまも心掛けています。それからなんでもいので、大川で一番、日本で一番になれたらいいですね。極端な話ですが、声の大きさが一番でもいいです。歩の音が一番いいなれたらなと思っています」